

次の語群にそれぞれ関連する宗教名を記入し、その宗教の成立、あるいは成立と変遷を、下記の語をすべて用いて説明しなさい。(約 100 字程度)

バビロン捕囚・ソロモン・エジプト

津田塾大

### ユダヤ教

ヘブライ人の一部はエジプトで受難の後、モーセに率いられてパレスチナに移住した。前 10 世紀、ソロモン王時代に栄華を極めた王国も分裂し、さらにバビロン捕囚などの苦難を経た後、前 6 世紀後半に教団を成立した。

出エジプトを指導したモーセとヤハウェの契約で成立した一神教に基づき、民族統合を果たしたヘブライ王国はソロモンの全盛期を経て分裂。カルデアによるバビロン捕囚後、ゾロアスター教の影響を受けて前 6 世紀後半にユダヤ教を確立

ユダヤ民族の歴史とユダヤ教の特色について、以下の 5 つの語句を用いて説明せよ。なお、これらの語句を使用した箇所には下線を引くこと。(300 字以内)

出エジプト ペリシテ人 ユダ王国 アッシャリア アケメネス朝

パレスチナからエジプトに移ったセム系ヘブライ人は、前 13 世紀にモーセに率いられて「出エジプトを行い、パレスチナに帰還してペリシテ人と抗争しつつヘブライ王国を建国した。ヘブライ王国は 10 世紀にはイエルサレムを都とし、ダヴィデ王とソロモン王の下で全盛期を迎えたが、ソロモン王の死後南北に分裂し、北のイスラエル王国は前 8 世紀にアッシャリアに、南のユダ王国は前 6 世紀に新バビロニアに滅ぼされた。この時バビロン捕囚で連行されたユダヤ人は、その後アケメネス朝によって解放されたが、この間に民族の歴史とゾロアスター教の影響を背景に、偶像崇拜を否定する唯一神信仰と選民思想、メシア思想を特色とするユダヤ教が形成された。

前二千年期末の東地中海における諸語族の動きについて、400字以内で述べよ。

前13～前12世紀の東地中海地域では民族移動による大きな変動が生じた。

バルカン半島ではクレタ文明の影響を受けた印欧系ギリシア人の一派アカイア人によるミケーネ文明が栄えていたが、「海の民」の侵入と鉄器を使用するギリシア系ドーリア人の南下で崩壊した。小アジアでは、初めて鉄器を使用した印欧系のヒッタイトとエジプト新王国の二大勢力が対立していたが、「海の民」によりヒッタイトは滅亡し、エジプトも衰退に追い込まれた。この結果、東地中海沿岸ではセム系諸民族の活動が活発化した。フェニキア人はシドン・ティルスなどの都市国家を拠点として地中海沿岸を結ぶ海上交易で、アラム人はダマスクスを拠点に内陸アジア貿易で活躍し、彼らが改良した表音文字は東西世界に多大な影響を与えた。パレスチナではヘブライ人がエジプトから逃れた民を加えて、王国を形成し、後のユダヤ教の原型を形成した。

紀元前 17 世紀から紀元前 12 世紀にかけてのエジプトとシリア地方との関係について、以下の語句を用いて述べなさい。400 字以内で解答し、指定された語句には下線を施しなさい。

テル＝エル＝アマルナ

戦車と馬

アメンホテプ4世

「海の民」 ヒクソス

前 17 世紀にエジプト中王国は、シリア方面から戦車と馬をもって侵入してきたヒクソスによって征服された。しかし前 16 世紀に新王国がおこってヒクソスを撃退し、さらにシリア方面にまで進出した。前 14 世紀、アメンホテプ4世は従来のアモン＝ラーを主神とする多神教を禁じてアトン一神の信仰を強制し、都をテーべからテル＝エル＝アマルナに移した。彼は自らの名前をイクナートンと改め、王妃ネフェルティティは王の改革を支持した。この時期に、エジプトと北の諸国、ヒッタイト、ミタンニ、アッシリア、バビロニアなどとの間に交易が盛んに行われた。改革は王の死によって終わったが、エジプトには珍しい写実的なアマルナ美術を生んだ。前 13 世紀末から前 12 世紀初めにかけて地中海方面より攻撃してきた「海の民」により、シリア地方を支配していたヒッタイト、エジプトの勢力が後退し、セム系のアラム人、フェニキア人、ヘブライ人の活動が活発化した。

メソポタミアの歴史と文化の特徴を、エジプトの場合と比較しながら、以下の語句を用いて説明しなさい。

(400字以内) 統一国家 アッカド人 ナイル川の氾濫 都市国家 太陽暦  
シュメール人 六十進法 メネス王 農耕社会 天然の要害 筑波大

オリエントは一般に雨が少なく、砂漠や岩山が多い地域だが、ティグリス・ユーフラテス川、ナイル川など大河の流域では、はやくから農耕社会が形成された。メソポタミアでは、前3000年頃からシュメール人が都市国家を形成したが、開放的な地形もあり、セム系アッカド人をはじめ多くの民族が侵入し、興亡をくりかえした。一方、ナイル川の氾濫が沃土をもたらすエジプトでは、治水のために強い権力が生まれ、前3000年頃メネス王のもとに統一国家が形成された。また、砂漠と海という天然の要害に固まれ、ハム系民族が長期にわたり安定した文明を形成した。文化に目を向けると、メソポタミアでは、楔形文字や六十進法、太陰暦が用いられ、法律・天文・暦法など実用の学問が発達した。また、多神教がおこなわれ、民族の交替に伴い最高神もかわった。一方、エジプトでは靈魂の不滅が信じられ、神聖文字が作られ、太陰暦とならんで太陽暦が用いられた。(396)

※メソポタミアとエジプトは、大河の流域に形成された古代文明という点で共通する。歴史については、四囲に開放的なメソポタミアと砂漠と海に固まれるエジプトという地理的条件の相違を指摘し、民族興亡の激しかったメソポタミアと、安定したエジプトを対比する。文化の特徴については、宗教・文字・暦などについて述べる。

今日、南アジアと呼ばれる広大な地域には、系統を異にするさまざまな人々が居住していた。この地域において、インド世界として特有の社会・宗教・文化体系の生成が始まったのは、たかだか最近 3500 年ほどのことである。こうして出現したインド古代の社会・宗教・文化体系とはどのようなものであり、それらはどのような過程を経て形成されたのかを説明しなさい。その際、下記の語句を必ず使用し、その語句に下線を引きなさい。(200 字以内)

インダス文明 ヴェーダ ブラーフマン\* ヴァルナ ダルマ  
マウリヤ朝 (注)\*バラモンとも呼ばれる。

インダス文明滅亡後の前 1500 年頃、パンジャーブ地方に定住したアーリア人によりヴェーダを聖典とするブラーフマン（バラモン）中心の信仰が生まれた。その後彼らは先住民を征服しつつガンジス川流域に進出し、4 ヴァルナからなる身分制度を形成した。前 6 世紀頃にはバラモンの祭式形式主義を批判し、万人平等をとく仏教やジャイナ教が成立。インド初の統一国家であるマウリヤ朝のアショーカ王は仏教に帰依し、ダルマに基づく統治をおこなった。

#### (別解)

前 2000 年頃パンジャーブ地方に定住したアーリヤ人は神への賛歌を集めた『リグ=ヴェーダ』を中心とするバラモン教の信仰を生み、前 1000 年頃のガンジス川流域への進出後、部族集団ごとに小王国を形成した。この間、バラモンを頂点とするヴァルナ制度が成立したが、バラモン教の祭式万能主義への反発から、前 6 世紀頃宗教改革運動が起り、ウパニシャッド哲学やクシャトリヤ・ヴァイシヤが支持する仏教やジャイナ教が生まれた。マウリヤ朝のアショーカ王はダルマによる仏教立国を目指した。

7世紀から10世紀後半までのイスラーム世界におけるカリフ制度の変遷について、以下の語句を用いて説明しなさい。

アブー＝バクル イベリア半島 エジプト 大アミール ムアーウィヤ 筑波大学

632年のムハンマドの没後、ムスリム社会の指導者としてアブー＝バクルがカリフに選出された。最初の4人の正統カリフは合議で選ばれたが、第4代カリフのアリーが暗殺され、ムアーウィヤがカリフとなってウマイヤ朝を開き、以後、カリフ位は世襲された。750年にはウマイヤ朝が倒され、新しいカリフ政権のアッバース朝が開かれたが、ウマイヤ朝の残党がイベリア半島に逃れて後ウマイヤ朝を建設したため、カリフが全ムスリム社会を統治する体制が綻びた。946年にアッバース朝の首都バグダードがブワиф朝によって攻略されるが、ブワиф朝の君主はカリフを廢さず、その権威を利用して大アミールになり、政治と軍事の実権を握った。また、エジプトのカイロを首都に定めたファーティマ朝とイベリア半島の後ウマイヤ朝の君主もカリフを自称するようになった。10世紀後半には三つのカリフ政権が並立し、一人のカリフに全ムスリムが従う体制は崩壊した。

19世紀以来、イスラーム世界の改革を目指した様々な運動、なかでも「イスラーム復興主義」と呼ばれる立場において、しばしばムスリムが立ち戻るべき理想的な社会とみなされたのが、預言者ムハンマドの時代およびそれに続く「正統カリフ時代」のウンマ(イスラーム共同体)であった。しかし実際には 661 年にウマイヤ朝が成立するまでの間、様々な出来事を経てウンマのあり方は大きく変化した。

ウンマ成立の経緯および「正統カリフ時代」にウンマに生じた主要な政治的事件とその結果について、以下のキーワードをすべて用いて 300 字以内で説明せよ。

ヒジュラ カリフ シーア派

京大

預言者ムハンマドはメッカの大商人を批判して迫害を受けると、ヒジュラを行いメディアに移住した。神の前の平等を原則とするウンマを樹立し、アラビア半島の統一を達成した。彼の没後、ムスリムは預言者の後継者であるカリフを選出してウンマの混乱を收拾し、その指導の下、ジハードを展開してシリア、イラン、エジプトを支配し、征服地には多くのアラブ人ムスリムが家族を伴い移住した。一方、ウンマ内ではカリフ権をめぐる対立が起り、第 4 代正統カリフのアリーが暗殺され、彼と敵対するシリア総督ムーア・ウィアがカリフを称してウマイヤ朝を建てるなど、アリーを支持する勢力はアリーとその子孫のみを正統な指導者とするシーア派を形成した。

10世紀のイスラーム世界で成立したシーア派の王朝を二つ挙げよ。これら二つの王朝がスンナ派のアッバース朝カリフにどのように対応したかをそれぞれ 60 字以内で記せ。

東大

### ファーティマ朝とブワイフ朝

ファーティマ朝は当初からカリフを称してアッバース朝の権威を否定し、バグダードに対抗してカイロをイスラーム文化の中心とした。

ブワイフ朝はバグダードに入城してカリフに代わり一切の政治的権限を行使して武断政治を行い、カリフの権威は名目的となつた。

10～11世紀は、西アジアにおけるイスラーム世界の歴史展開のなかで、一つの大きな転換期であったと考えられる。このように考えられる理由を、政治・社会・宗教の三つの側面から、300字以内で具体的に説明せよ。  
京大

政治面＝10世紀になるとアッバース朝のもとで各地の政治的分裂が決定的

　　ブワиф朝がカリフから実権を奪って武断政治を開始

　　→11世紀、セルジューク朝のもと、スルタン制が確立

社会面＝イクター制の成立 各地の軍事政権は軍人マムルークに支えられ、  
　　彼らの増加は財政難をもたらす。ブワиф朝のもとで、俸給制に代わり  
　　農民からの徴税権を軍人に与える＝イクター制が導入→西アジア一帯に普及

宗教面＝イスラーム教の形式主義化に対する批判からスーエフズムが成立  
　　{イスラーム教が大衆に浸透する原動力となる}

非ヨーロッパ世界に「古代」「中世」「近代」という時代区分をそのまま適用することはできない。しかし非ヨーロッパ世界の多くがその前後の時代と異なる「中世」的な時代を経たことも事実である。イスラーム世界を例に以下の二つの軸を説明するなかで「中世」という時代の政治体制、思想状況の特徴を述べよ。 {マムルーク・スーアーイー信仰} 一橋大

10世紀にカリフを頂点とする旧体制が崩れ、軍事政権体制へ移行

マムルークが軍隊の主力

[軍人が農村を直接支配＝イスラーム世界の軍事封土制であるイクター制が成立]

一方、民衆の間では、イスラーム神学の形式主義化に反発した神秘主義が隆盛

[神のと合一を目指すスーアーイー信仰]

商人の活動とともに、各地のイスラーム化が進行

セルジューク朝、モンゴル帝国、オスマン朝は、ともにトルコ系ないしモンゴル系の軍事集団が中核となって形成された国家であり、かつ事情と程度は異なるものの、いずれも西アジアおよびイスラームと深くかかわった。この3つの政権それぞれのイスラームに対する姿勢や対応のあり方について、相互の違いに注意しつつ300字以内で述べよ。句読点も字数に含めよ。

京都大学

セルジューク朝は遊牧民として中央アジアから起こり、1055年にブワиф朝を滅ぼしてバクダードに進出し、君主は「スルタン」の称号を得て、西アジア一帯を支配しイスラームの政治的地位を確立した。  
1206年チングギス=ハン建国によるモンゴル帝国は、広大な領土を維持するため宗教には寛大であった。四つのハン国に分裂した後イランを支配したイル=ハン国のガザン=ハンはイスラーム教を国教とした。  
13世紀末小アジアに起きたオスマン朝は1453年ビザンツ帝国を滅ぼし、シリア・エジプトをあわせ、16世紀初頭、マムルーク朝を倒しメッカとメディナの保護権を得て、イスラーム世界における指導的立場に立った。

広大なイスラーム世界は、10世紀におけるアッバース朝の衰退以降、イスラーム諸王朝が分立する時代に入る。しかし、ヨーロッパ史で大航海時代といわれる16世紀には、三つの強大な王朝が鼎立する時代を迎えた。この三つの王朝の崩壊過程から、イスラーム世界の近代は生まれる。その一つは、イスタンブルを首都とするオスマン朝であるが、あとの二つの王朝は何か。その名前を述べ、それぞれの王朝の成立経緯(いつ、誰によって建設され、どの地域を、どのような理念で統治したのか、など)を簡潔に述べなさい。(200字以内)

一橋大

一つはサファヴィー朝で、1501年にイスマーイール1世によって創建されイランを支配した。この王朝はシーア派を国教としてスンナ派のオスマン朝に対抗するとともに、伝統的なシャーの称号を用いてイラン人の民族意識を高揚させた。

もう一つはバーブルが建設し北インドを支配した王朝で、彼がティムールとチンギス＝ハンの血縁でもあったことからムガル朝と称された。この王朝の君主もスルタンではなく、皇帝の称号を用いた。

西暦 8 世紀半ば、非アラブ人ムスリムを主要な支持者としてアッバース朝が成立したことを契機に、イスラーム社会の担い手はますます多様化していった。なかでも 9 世紀以降、イスラーム教・イスラーム文化を受容した中央アジアのトルコ系の人々は、そのち近代に至るまでイスラーム世界において大きな役割を果たすようになる。この「トルコ系の人々のイスラーム化」の過程について、とくに 9 世紀から 12 世紀に至る時期の様相を、以下の二つのキーワードを両方とも用いて 300 字以内で説明せよ。

京都大学

マムルーク

カラハン朝

9 世紀後半にイラン系サーマーン朝がアム川以北を支配し、この地のイスラーム化が進展する一方でトルコ系騎馬遊牧民奴隸兵を軍人としてマムルーク軍団を組織した。同じ頃、アッバース朝カリフもトルコ人マムルークを親衛隊に組織するようになった。10 世紀にトルコ系のカラハン朝が成立し、ハンのイスラーム教改宗を契機にトルコ人がイスラーム化し、11 世紀にはセルジューク朝などを建国した。中央アジアから西方へ進出したセルジューク朝がシリアや小アジア方面に進出してビザンツ帝国を圧迫したことは、十字軍を引き起こす一因となった。マムルーク出身者はイランから中央アジアにかけてホラズム朝を、アフガニスタンにはガズナ朝を建国した。

次の用語は世界史上で活躍したある民族に関わるものである。この民族の発展の歴史を 40 字以内で説明しなさい。

　　ウィーン包囲・スルタン・1453 年・1571 年・1878 年

　　筑波大

オスマン帝国は 13 世紀末、小アジア西北部に建国した。14 世紀末までに小アジアとバルカン半島東部に領土を拡大し、1402 年アンカラの戦いでティムールに敗北したが、復興後 1453 年にはビザンツ帝国を滅ぼし、イスタンブルを首都とした。1517 年にマムルーク朝を滅ぼし、シリアとエジプト征服し、メッカ、メディナを保護下に置き、スンナ派イスラーム世界での指導的立場を確立した。

16 世紀半ばのスレイマン 1 世が全盛期であり、北アフリカ・ハンガリーなどに領土を拡大し、ウィーン包囲で神聖ローマ帝国を圧迫した。

プレヴェザの海戦で地中海を制覇し、スルタンは絶対専制君主として大帝国を支配した。

1571 年のレパントの海戦の敗北後も繁栄は続いたが、17 世紀末（第 2 次ウィーン包囲失敗）から衰退し、19 世紀になると列強の介入で東方問題が生じ、ギリシアの独立に始まり、特に 1878 年のベルリン会議ではルーマニアなど三国が独立して領土は縮小していく。

オスマン帝国の建国前後から 17 世紀末頃のイスラーム諸国と西欧諸国の関係について以下の語をすべて用いて 280 字内で説明しなさい。

1453 年・国土回復運動・スルタン＝カリフ制・スレイマン 1 世・セルジューク朝・ウィーン包囲・マムルーク朝

津田塾大

西欧諸国はセルジューク朝の小アジア進出を契機として始まった十字軍遠征は失敗するが、15 世紀末、国土回復運動でイベリア半島からイスラーム勢力を驅逐した。13 世紀末に勃興したオスマン帝国はバルカン半島に進出し、1453 年にビザンツ帝国を滅ぼした。16 世紀にマムルーク朝を倒した際にカリフ権を獲得し、これをスルタン＝カリフ制の由来とした。スレイマン 1 世の時最盛期となり、神聖ローマ皇帝を圧迫し、東地中海を支配した。レバントの海戦では敗北したが、西欧諸国との勢力関係に変化はなく、第 2 次ウィーン包囲失敗後の 1699 年カルロヴィッツ条約以降、ヨーロッパにおける帝国の領土は縮小した。

15世紀後半から17世紀にかけてヨーロッパは東方世界とりわけ小アジアから勃興したオスマン帝国との政治的、軍事的、文化的接触により、歴史上大きな変容を遂げることになった。この時期のオスマン帝国とヨーロッパとの関係をオスマン帝国の側から以下のすべてを用いて300字以内で論述せよ。

スレイマン1世・イスタンブル・ウィーン・官僚制・プレヴェザの海戦・レパントの海戦  
・絶対主義体制・宗教的寛容・宗教改革運動

都立大

オスマン帝国は1453年にコンスタンティノープルを陥落させ、イスタンブルと改称し首都としたスレイマン1世による1529年のウィーン包囲は神聖ローマ皇帝カール5世にプロテスタント諸侯との妥協を余儀なくさせ、宗教改革運動を前進させた。一方、帝国内では宗教的寛容策をとり、ヨーロッパで迫害されたユダヤ人を保護した。プレヴェザの海戦でスペイン・ヴェネツィア連合艦隊を破って地中海の制海権を握り、レパントの海戦での一時的な敗北後も西欧世界に圧力を加え続けた。整備された官僚制や強力な常備軍は西欧世界での絶対主義体制の形成に大きな影響を与えた。

東南アジアは、その一部に含まれるインドシナという地域名に象徴されるように、インド・西アジアと中国とを結びつける位置にある。この地域は大陸部と島嶼部に大きく分けられるが、そこには地理的条件を反映した歴史的・文化的な相違があり、それが現在の国家のあり方にも影響を及ぼしている。11世紀以降に現在の東南アジアにおける宗教分布につながっていく動きが見られる。その動きについて、以下の語句をすべて用いて、120字以内で記しなさい。使用した語句には、下線を引くこと。

大陸部、 島嶼部、 スリランカ、 マラッカ王国、  
大乗仏教、 上座部仏教 首都大東京

大陸部では11世紀にビルマでパガン朝がおこり、スリランカとの交流で上座部仏教が広まって、モンゴルに押されて南下したタイ人にも影響を与えた。島嶼部では大乗仏教やヒンドゥー教を中心だったが、15世紀以後マラッカ王国によりイスラームが広まった。

東南アジア地域を経由する海路による東西交流・交易は、紀元前後から盛んにおこなわれるようになった。紀元前後から 5 世紀ごろにかけての東南アジア地域は東西交流・交易にどのように関わっており、またそれからどのような影響を受けていたと考えられるか。以下の語を参考にしながら 350 字以内で説明しなさい。(解答の文中にこれらの語を使ってよいが、すべてを使う必要はない。)

日南郡

林邑

扶南

オケオ

インド

ローマ

名古屋大

東南アジアでは海の道の寄港地としての港市国家が発展した。1 世紀頃にメコンデルタに成立した扶南の港オケオからはローマの金貨や漢代の鏡が出土していることや、2 世紀半ばに大秦王安敦(ローマ皇帝マルクス=アウレリウス=アントニヌス)の使者と称する者が武帝によってベトナムに設置された日南郡に到着したことから、中国とローマが海の道で結ばれていたことがわかる。またローマとインド間で季節風貿易が行われていたことは『エリュトゥラ一海案内記』に記されている。その後ベトナム南部には林邑が成立するが、中国南朝時代には扶南や林邑から熱帯物産が中国に輸出された。ベトナムには漢字や儒教などの中国文化が伝わったが、他方でサンスクリット語、ヒンドゥー教、仏教などのインド文明が東南アジアに伝わり、中国・インド文明の受容が進んだ。

マレー半島南西部に成立したマラッカ王国は 15 世紀に入ると国際交易の中心地として成長し、東南アジアにおける最大の貿易拠点となった。15 世紀から 16 世紀初頭までのこの王国の歴史について、外部勢力との政治的・経済的関係および周辺地域のイスラーム化に与えた影響に言及しつつ、300 字以内で説明せよ。解答は所定の解答欄に記入せよ。句読点も字数に含めよ。京大

マラッカ王国は、明の永楽帝が 15 世紀初頭に派遣した鄭和の遠征隊がインド洋へ向かう際の重要な拠点となり、国際交易都市として発展した。この王国はタイのアユタヤ朝やマジャパヒト王国の圧迫を受けていたが、明と朝貢関係を結ぶことによって独立を守った。また王が 15 世紀半ばにイスラームに改宗して西方のムスリム商人との結びつきを強化すると、インド洋からは香辛料を、中国からは絹や陶磁器をもたらす貿易の中継基地として栄え、東南アジア島嶼部のイスラーム化を促す契機となった。この結果ジャワのマタラム王国やスマトラのアチェ王国などのイスラーム政権が成立した。しかし大航海時代を迎えると、1511 年にポルトガルによって占領された。

10～11世紀は、西アジアにおけるイスラーム世界の歴史展開のなかで、一つの大きな転換期であったと考えられる。このように考えられる理由を、政治・社会・宗教の三つの側面から、300字以内で具体的に説明せよ。京大

政治面では、10世紀になるとアッバース朝のもとで各地の政治的分裂が決定的となり、半ばにはブワиф朝がカリフから実権を奪って武断政治を開始した。11世紀半ばにブワиф朝を滅ぼし、バグダードに入城したセルジュー朝のもとスルタン制が確立し、カリフの権威は名目的なものとなった。社会面ではイクター制が成立し、各地の軍事政権は軍人マムルークに支えられ、彼らの増加は財政難をもたらした。ブワиф朝のもとでは俸給制に代わり農民からの徴税権を軍人に与えるイクター制が導入され、11世紀に西アジア一帯に普及した。宗教面ではイスラーム教の形式主義化に対する批判からスufismが成立し、イスラーム教が大衆に浸透する原動力となった。

イギリスとフランスは18世紀に世界商業の霸権をめぐる対立を激化させ、当時ヨーロッパで起こった戦争に連動して、植民地でも衝突を繰り返した。18世紀のインドでイギリスがフランスに対して優位を確立していく過程を、インドの地方勢力の関わり方にも触れながら、次の語をすべて用いて述べなさい。(300字以内)

ムガル帝国

七年戦争

ベンガル

津田塾大 学芸

ムガル帝国の衰退に伴い、イギリスはマドラス・ボンベイ・カルカッタで通商活動を展開し、これに対抗するためフランスはポンディシェリとシャンデルナゴルを基地とした。両国はムガル帝国の衰退に乗じて、地方豪族を巻き込んだ勢力争いを展開した。ヨーロッパでオーストリア継承戦争が起こると、インド南部で両国とインドの地方勢力がカーナティック戦争をひき起こした。さらに七年戦争の時にも、インド東部でイギリス東インド会社の傭兵軍を率いたクライヴが、フランスとベンガル太守の連合軍をプラッシーの戦いで破り、パリ条約でイギリスはインドからフランス勢力を駆逐したのち、ベンガル・ビハール両地域の徴税権を獲得した。

インド大反乱に先立つ時期、イギリス東インド会社は、商業活動を営む会社から統治機関へと変容していた。この過程について、以下の語句を使って300字以内で述べなさい。ただし、最初に用いた箇所に下線を付すこと。

自由貿易	ザミンダーリー制
徴税権(ディーワーニー)	プラッシーの戦い

イギリス東インド会社は、マドラス、ポンベイ、カルカッタを拠点に商業活動に従事していたが、プラッシーの戦いで勝利したのち、ベンガルなどの徴税権(ディーワーニー)を獲得したことを契機に、本来の貿易会社から地税を徴収する統治機関に変容していった。地税徴収方法としては地主を土地所有者として彼らから徴収するザミンダーリー制や、小農民を土地所有者として彼らから徴収するライヤットワーリー制があった。産業革命後、自由貿易を主張する産業資本家の要求により東印度会社のインド貿易独占権が廃止され、その後、商業活動そのものが停止されたことによって、インドの統治機関へと変容するにいたった。

マレー半島南西部に成立したマラッカ王国は 15 世紀に入ると国際交易の中心地として成長し、東南アジアにおける最大の貿易拠点となつた。15世紀から16世紀初頭までのこの王国の歴史について、外部勢力との政治的・経済的関係および周辺地域のイスラーム化に与えた影響に言及しつつ、300 字以内で説明せよ。

### 京都大学

マラッカ王国は、明の永楽帝が 15 世紀初頭に派遣した鄭和の遠征隊がインド洋へ向かう際の重要な拠点となり、国際交易都市として発展した。この王国はタイのアユタヤ朝やマジャパヒト王国の圧迫を受けていたが、明と朝貢関係を結ぶことによって独立を守つた。また王が 15 世紀半ばにイスラームに改宗して西方のムスリム商人との結びつきを強化すると、インド洋からは香辛料を、中国からは絹や陶磁器をもたらす貿易の中継基地として栄え、東南アジア島嶼部のイスラーム化を促す契機となつた。この結果ジャワのマタラム王国やスマトラのアチェ王国などのイスラーム政権が成立した。しかし大航海時代を迎えると、1511 年にポルトガルによって占領された。

アヘン戦争の敗北と太平天国による動乱を経た清朝はさまざまな近代化政策をとらざるを得なくなった。この動きのなかで戊戌の変法はどのような位置を占めているのか、日露戦争の前後までを視野におさめ 300 字以内で述べよ。

京大(300字)

1860 年代からの洋務運動は、軍需工業中心の産業諸部門における西洋技術を利用することに終始し、西洋思想や社会制度の導入は実現できず、清仏戦争・日清戦争と敗北して完全に破綻した。この反省から康有為らが提唱し光緒帝に認められて実施されたのが、立憲君主政体の樹立を目指す戊戌の変法である。この政治改革は保守派の反撃で挫折したが、その主張は義和団事件後に清朝が行った科挙廃止(1905)を含む官制・教育制度の改革によって具体化され、1908 年には明治憲法を模範とする憲法大綱も宣布された。しかし、この間に革命派が台頭し、1905 年孫文は東京で中国同盟会を結成した。彼は三民主義を掲げて清朝打倒と共和政樹立を主張した。

次の問について、400字以内で解答しなさい。

19世紀末から20世紀前半までの朝鮮半島をめぐる歴史の展開について、国際関係にも留意しつつ、以下の語句を用いて説明しなさい。

三・一運動 下関条約 大韓帝国 義兵鬪争 ポーツマス条約

筑波大

1894年に朝鮮半島での主導権を巡って日清戦争が勃発した。翌1895年に締結された下関条約により清朝は朝鮮への干渉権を放棄した。これを受けた朝鮮国王は1897年に国名を大韓帝国と改称し、自主独立の国であることを内外に示した。しかし日清戦争後は朝鮮と中国東北地方の支配をめぐって日本とロシアとの間で対立が激化してしまった。これにより1904年に日露戦争が勃発した。その講和条約が1905年にアメリカにおいて調印されたポーツマス条約である。これによりロシアは韓国に対する日本の保護権を認めた。日本は朝鮮半島への支配を強化し、義兵鬪争という朝鮮民衆による激しい抵抗を受けたものの、1910年には韓国併合を断行した。第一次世界大戦後にパリで開催された講和会議において民族自決が唱えられると、これに触発されて朝鮮の独立を求める民衆運動が活発化した。これが三・一運動であるが、日本側官憲による徹底した弾圧を受けることになった。

東アジアの「帝国」清は、アヘン戦争敗戦の結果、最初の不平等条約である南京条約を結び、以後の 60 年間にあっても、対外戦争を 4 回戦い、そのすべてに敗れた。清はこの 4 回の戦争の講和条約で、領土割譲や賠償金支払いのほか、諸外国への経済的権益の承認や、隣接国家との関係改変を強いられたのである。この 4 回の戦争の講和条約に規定された諸外国への経済的権益の承認と、清と隣接国家との関係改変、および、その結果、清がどのような状況に陥ったのかを、300 字以内で説明せよ。

京都大学

アロー戦争後の北京条約で開港場が増加し、外国公使の北京駐在を認めたことから総理衙門を設置して対等外交を始めた。清仏戦争後の天津条約で清は阮朝越南国の宗主権を放棄し、さらに日清戦争後の下関条約でも朝鮮国に対する宗主権を放棄したことで冊封体制は崩壊した。下関条約で認められた開港場での企業設立権は、最惠国待遇条項によって列強も享受した。またロシアは三国干渉の代償として東清鉄道敷設権を得た。以後列強は租借地や勢力範囲を設定し、鉄道敷設権や鉱山採掘権を得た。義和団事件後の辛丑和約で多額の賠償金を認めたことは列強からの借款が不可避となり半植民地化が一層進んだが、国内では清朝打倒を目指す革命運動が高揚した。

19世紀になると、アジア諸地域では、ヨーロッパ列強の進出に対する抵抗運動が展開された。また同時に、近代化をはかつて自らを変革する試みも見られた。19世紀半ばのオスマン帝国期から第一次世界大戦後のトルコ共和国期に至るトルコの近代化の動きについて、政体の変化を中心に300字以内で述べよ。句読点も字数に含めよ。　京大（300字）

19世紀半ばのオスマン帝国では、列強に対抗しタンジマートによる西欧化が進行し、1876年には近代的立憲国家を目指すミドハト憲法が制定された。しかし、露土戦争の勃発を口実に憲法は停止し、スルタンの専制体制が復活した。これに不満を持つ青年トルコ（統一と進歩委員会）により1908年に立憲制が復活したが、帝国は第一次世界大戦で敗北し、セーヴル条約で列強による分割の危機に瀕した。アンカラで国民会議を組織したケマルは、1922年にスルタン制を廃止して帝国を崩壊させた。翌年、ローザンヌ条約で主権を回復し、トルコ共和国を樹立した。その後、カリフ制廃止やローマ字採用など西欧的な近代国家の建設を推進した。

内外の圧力で崩壊の危機に瀕していた、近代のオスマン帝国や成立初期のトルコ共和国では、どのような人々を結集して統合を維持するかという問題が重要であった。歴代の指導者たちは、それぞれ異なる理念にもとづいて特定の人々を糾合することで、国家の解体を食い止めようとした。オスマン帝国の大宰相ミドハト＝パシャ、皇帝アブデュルハミト2世、統一と進歩委員会(もしくは、統一と進歩団)、そしてトルコ共和国初代大統領ムスタファ＝ケマルが、いかにして国家の統合を図ったかを、時系列に沿って300字以内で説明せよ。

京大

多民族・多宗教のオスマン帝国で国家統合をはかるには、均質な国民の創出が必要である。ミドハト＝パシャが制定した憲法では、帝国内居住者は宗教・宗派にかかわらずオスマン人として平等な存在とされた。しかしアブデュル＝ハミト2世は露土戦争を口実に憲法を停止し専制政治をしいたが、パン＝イスラーム主義を利用して広くムスリムの支持を得ようとした。統一と進歩委員会による革命政権は憲法を復活したが、パン＝トルコ主義を唱えてトルコ民族主義を強調した。第一次大戦後に登場したムスタファ＝ケマルはスルタン制を廃止して、共和国を樹立し脱イスラーム化を進め、政教分離、女性解放などの改革を推進して、西洋型国民国家の樹立を目指した。

15世紀末以降、ヨーロッパの一部の諸国は、インド亜大陸に進出し、各地に拠点を築いた。16世紀から18世紀におけるヨーロッパ諸国この地域への進出の過程について、交易品目に言及し、また、これらのヨーロッパ諸国の勢力争いとも関連づけながら、300字以内で説明せよ。京大

16世紀にポルトガルはゴアを拠点として、香辛料貿易を独占していった。17世紀になるとオランダがセイロン島をポルトガルから奪うが、他方でイギリスがマドラス、ポンベイ、カルカッタを、またフランスはポンディシェリ、シャンデルナゴルを拠点として、インドから藍や綿布を輸送した。18世紀になると英仏両国は植民地戦争を繰り広げるが、南インドでのカーナティック戦争とベンガル地方でのプラッシーの戦いでイギリスが勝利し、インドでの霸権を築いた。その後イギリスはベンガル地方の徵税権を獲得し、マイソール戦争で南インドを征服し、インドを植民地化していった。イギリスの産業革命の結果、機械製綿織物をインドに輸出するようになった。

東南アジアでは、島嶼部においては 18 世紀までにすでに、西洋諸国がかなりの影響力を及ぼすようになっていたが、19 世紀になると、大陸部も含めて、西洋諸国による東南アジアの植民地化が進められていった。19 世紀の東南アジア大陸部・マレー半島におけるイギリスとフランスの動きについて、以下の語を参考にしながら 350 字以内で説明しなさい(必ずしも、それらのすべてを用いる必要はない)。

海峡植民地 マレー連合州(マラヤ連邦、連合マレー諸州)

ビルマ戦争(イギリス=ビルマ戦争)インド帝国 清仏戦争

フランス領インドシナ連邦

名古屋大学

イギリスはペナン、マラッカ、シンガポールを併せて、1826 年に海峡植民地を形成した。19 世紀末にはマレー半島南部を支配し、マレー連合州を成立させ、ゴムのプランテーションや錫の採掘を行った。さらに 3 度のビルマ戦争でコンバウン朝を滅ぼし、ビルマをインド帝国に併合した。フランスはナポレオン 3 世の時代に仏越戦争をおこしてベトナムとサイゴン条約を結び、コーチシナ東部を獲得した。その後カンボジアを保護国化したが、ベトナムとユエ条約を結んでこれを保護国化した。これに対して清が宗主権を主張したため清仏戦争が勃発したが、フランスは天津条約で清の宗主権を放棄させ、ベトナムとカンボジアを併せて、フランス領インドシナ連邦を成立させ、後にラオスも併合した。タイは英仏両植民地の緩衝地帯として独立を維持できた。

16世紀以来オスマン帝国領であった中東アラブ地域のうち、エジプトやクウェートは19世紀末までに英國の保護下に置かれ、第一次世界大戦後、残りの地域も英仏両国により委任統治領として分割された。やがて諸国家が旧宗主国の勢力下に独立し、ついにはその勢力圏から完全に離脱するに至った。1910年代から1950年代までの、この分割・独立・離脱の主要な経緯について300字内で述べよ。

京大

第一次世界大戦中にサイクス・ピコ協定を結んだ英仏は、戦後のセーヴル条約で、イラク・ヨルダン・パレスチナをイギリスの、シリア・レバノンをフランスの委任統治領として分割した。20年代以降、イギリスの勢力下にエジプトが独立し、さらに委任統治領となった諸地域も英仏の勢力下に独立した。第二次世界大戦後、パレスチナにイスラエルが成立すると、アラブ諸国との間にパレスチナ戦争が引き起こされた。敗北したエジプトは52年の革命で共和国となり、スエズ戦争でイギリスの勢力を排除し、アラブ民族主義を高揚させた。その影響でシリアはエジプトとアラブ連合共和国を形成し、イラクでも革命が起り、イギリスの勢力圏から離脱した。

19世紀末からのインド亜大陸における民族運動は、ヒンドゥー教徒とイスラーム教徒の対立、およびこれを煽るイギリスの政策によって、しばしば困難な局面を迎えた。インド亜大陸の民族運動におけるヒンドゥー教徒とイスラーム教徒の関係や立場の違い、およびこれをめぐるイギリスの政策について、1947年年の分離・独立までの変遷を300字以内で説明せよ。

京大

19世紀末以降ベンガルを中心に民族運動が高まると、イギリスは両教徒の反目・分断を索して、1905年ベンガル分割令を発表した。これに対し、ヒンドゥー教徒中心の国民会議は翌年カルカッタ大会で急進的反英運動へと方針を転換し、ムスリムはイギリス支援の下に全インド＝ムスリム連盟を結成した。第一次大戦後、非暴力・不服従運動を展開した国民会議のガンディーは、一時的にムスリムの支持を得たが、両教徒の対立は深刻化し、ムスリムは反国民会議・親イギリス路線をとることになった。第二次大戦が終了すると、パキスタンの分離独立を求めるムスリム勢力と統一インドを主張するガンディーらが対立し、結局は分離独立するに至った。

中国共産党について、その結成から中華人民共和国建国にいたる歴史を、中国国民党との関係を含めて、300字以内で説明せよ。

京大

1921年コミニテルンの支援で結成された中国共産党は、24年の第1次国共合作によって中国国民党と提携した。北伐の最中、蒋介石の上海クーデタを機に国共が分裂すると、共産党は31年瑞金に毛沢東を主席とする中華ソヴィエト共和国臨時政府を樹立した。しかし国民党の包囲攻撃を受けて長征を開始し、延安に拠点を移した。その途上で八・一宣言を発し、内戦の停止と日本の侵略に対する民族統一戦線の結成を呼びかけた。それに呼応して西安事件が起こると国共は再接近し、37年日中戦争勃発直後に第2次国共合作が成立した。戦後、国共内戦が再燃すると農民の支持を獲得した共産党が勝利し、49年中華人民共和国が成立した。

1919 年ローラット法発布から 1935 年改正インド統治法制定に至る時期の、イギリスのインド統治と反英独立運動について、次の語をすべて用いて述べなさい。なお、これらの語を最初に用いたときに、下線を引きなさい。(300 字以内)

非暴力・不服従 ネルー 全インド＝ムスリム連盟 津田塾大

ローラット法の発布後、イギリスの弾圧でアムリットサル事件が起こると、インド民衆は国民会議派のガンディーの指導で非暴力・不服従運動を進め、自治獲得を目指した。大戦中から反英的な姿勢をみせていた全インド＝ムスリム連盟も当初はこれに同調したが、やがて宗教的対立から運動は停滞した。1929 年に国民会議派はラホール大会を開催し、ネルーの指導で完全独立を求めてプールナ＝スワラージを決議し、翌年から第 2 次非暴力・不服従運動を展開した。イギリスは弾圧する一方、懐柔策としてロンドンで英印円卓会議を開き、その結果として改正インド統治法を制定された。これにより各州の自治拡大は認可されたが、独立は達成できなかった。

日英同盟の締結から破棄にいたるまでの過程を、国際秩序の変化をふまえながら 400 字以内で説明しなさい。その際、以下の語句を必ず用い、用いた箇所に下線を引きなさい。

ロシア

アメリカ合衆国

第一次世界大戦

ワシントン会議

二十一ヶ条要求

東京外語大

条約改正によって列強の一員としての地位を認められた日本は、1902 年日英同盟を締結し、ロシアと対抗しながら東アジアの植民地化に参加した。日露戦争の結果日本は南満州の権益を獲得し、その後ロシアと協力しながら勢力を確保した。第一次大戦に際して日本は中国に 21ヶ条要求を突きつけ、山東省のドイツ権益継承、鉱山開発権の取得など露骨な勢力拡大を図り、中国の抗議にもかかわらずヴェルサイユ条約で各国からの承認を得た。アメリカ合衆国は列強の中国植民地化に対して門戸開放政策を掲げて市場の機会均等を求め、大戦中も威尔ソン大統領が 14ヶ条で民族自決、秘密外交の廃止、紛争の国際的解決などを主張した。こうした大戦後の国際秩序観をふまえ、東アジアの国際関係を再編するために合衆国はワシントン会議を主催し、中国の主権尊重と海軍軍縮を取り決めた。その結果、日本は山東省の権益を中国に返還し、日英同盟が廃棄されるに至った。

中国東北地方は、中国の政治の中心部から離れているが、北は黒竜江(アムール川)を境としてシベリアと接し、東は鴨緑江を経て朝鮮半島に連なることから、中国内地だけでなく、周辺地域との関係が深い。このような地理的特徴をもつ東北地方の近代の歩みについて、日本との関わりを念頭に以下の語句を用いて400字以内で説明しなさい。なお、解答文中では指定された語句に下線を施すこと。

張作霖　日ソ中立条約　日露戦争　溥儀　南満州鉄道　筑波大学

日清戦争後、朝鮮に影響力を浸透させた日本はシベリアから中国への進出を図るロシアとの間で、東北地方を戦場とする日露戦争を起こした。この戦争に勝利した日本はロシアから、遼東半島南部の租借権と、東清鉄道支線の長春～旅順間の南満州鉄道の経営権を譲り受けると、経営会社(満鉄)を設立して東北経営を本格化させたが、その警備を狙った関東軍は軍閥の張作霖を援助して勢力浸透を図ろうとした。しかし、張作霖が国民革命軍に敗れると、彼が乗った列車を爆破して殺し、さらに1931年には満州事変を起こして、東北地方を直接支配下に置いた。そして、清朝の最後の皇帝であった溥儀を担ぎ出して、彼を首班とする満州国を樹立した。日本は満州国の安定と中国への戦線拡大、さらには南方進出を有利に進めるために、1941年にソ連との間で日ソ中立条約を締結したが、1945年にソ連が満州国内に侵攻したため、日本の東北支配は終焉した。

義和団事件後、朝鮮の支配をめぐる日本とロシアの対立は深まり、日露戦争へと発展した。日本はポーツマス条約で遼東半島の租借権や南満州鉄道の利権を獲得し、中国東北地方への進出を開始した。中国では辛亥革命で中華民国が成立し、清朝が倒れると袁世凱が独裁を進めた。袁の死後は各地に軍閥が割拠し、東北地方では日本の支援を受けた奉天派の張作霖が権力を握った。張作霖が北伐軍に敗れると、日本は彼を爆殺し、東北地方の直接支配を狙ったが、息子の張学良は国民政府の中国統一に協力した。これに対し日本は、1931年の満州事変を機に清朝最後の皇帝溥儀を元首とする満州国を建国し、さらに華北進出を目指して日中戦争をおこした。ノモンハン事件でソ連に敗北した日本は、1941年の日ソ中立条約で北方の安全を確保し、太平洋戦争に突入した。しかし、日本はこの戦争に敗れ、満州国もソ連の侵攻で崩壊し、日本の東北地方支配は終わった。

中華民国期(1912～49年)における中国の政治的課題は、地方政治勢力による割拠を打破し、強力な中央集権国家を樹立して、外国による圧迫や侵略に対抗することにあった。当該時期の二大政治勢力である中国国民党と中国共産党とは1949年までに、上記の政治的課題を追求しつつ、どのように、また、なぜ連携と対立を繰り返したのか、以下の語句を用いて述べなさい。400字以内で解答し、解答文の中では指定された語句に下線を施すこと。

中華人民共和国

軍閥政権

日中戦争

国共合作

北伐

筑波大学

1920年代、中国は各地に割拠した軍閥政権により事実上分割統治されていた。これに対して中国国民党と中国共産党とは、1924年に第一次国共合作と呼ばれる協力関係を樹立し、1926年からの北伐により全国統一を目指した。しかし、その過程で両党の矛盾が顕在化し、1927年に中国国民党が全国政権である南京国民政府を樹立した一方、中国共産党は山岳地帯でのゲリラ戦に転じた。この対立は、資本家と農村の有産者の利益を代表とする中国国民党と、労働者と下層農民の利益を代表する中国共産党との間の政治基盤の差異に起因するものであった。1930年代、南京国民政府は全国政権としての体裁を整えたが、日本の東北・華北侵略に苦しんだ。1937年に日中戦争が勃発すると、両党は再び協力関係を築き(第二次国共合作)日本軍に対抗した。しかし、日中戦争に勝利すると、両党は支持基盤の矛盾から再び対立し、中国共産党が内戦に勝利して中華人民共和国を建国した。